

評価結果報告書

地域密着型サービスの外部評価項目構成

	項目数
I. 理念に基づく運営	11
1. 理念の共有	2
2. 地域との支えあい	1
3. 理念を実践するための制度の理解と活用	3
4. 理念を実践するための体制	3
5. 人材の育成と支援	2
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援	2
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	1
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	1
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	6
1. 一人ひとりの把握	1
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	2
3. 多機能性を活かした柔軟な支援	1
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	2
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	11
1. その人らしい暮らしの支援	9
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	2
合計	30

事業所番号	4271600746
法人名	社会福祉法人 新上五島町社会福祉協議会
事業所名	グループホーム さくら
訪問調査日	平成 19 年 11 月 20 日
評価確定日	平成 20 年 1 月 4 日
評価機関名	社会福祉法人 長崎県社会福祉協議会

○項目番号について

外部評価は30項目です。

「外部」の列にある項目番号は、外部評価の通し番号です。

「自己」の列にある項目番号は、自己評価に該当する番号です。参考にしてください。

番号に網掛けのある項目は、地域密着型サービスを実施する上で重要と思われる重点項目です。この項目は、概要表の「重点項目の取り組み状況」欄に実施状況を集約して記載しています。

○記入方法

[取り組みの事実]

ヒアリングや観察などを通して確認できた事実を客観的に記入しています。

[取り組みを期待したい項目]

確認された事実から、今後、さらに工夫や改善に向けた取り組みを期待したい項目に○をつけています。

[取り組みを期待したい内容]

「取り組みを期待したい項目」で○をつけた項目について、具体的な改善課題や取り組みが期待される内容を記入しています。

○用語の説明

家族等 = 家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。

家族 = 家族に限定しています。

運営者 = 事業所の経営・運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者（経営者と同義）を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。

職員 = 管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みます。

チーム = 管理者・職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	4271600746		
法人名	社会福祉法人 新上五島町社会福祉協議会		
事業所名	グループホーム さくら		
所在地 (電話番号)	長崎県南松浦郡新上五島町青方郷1379番地1 (電話) 0959-52-2597		
評価機関名	社会福祉法人 長崎県社会福祉協議会		
所在地	長崎県長崎市茂里町3番24号		
訪問調査日	平成19年11月20日	評価確定日	平成20年1月4日

【情報提供票より】(平成19年10月10日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 15 年 7 月 1 日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18 人
職員数	19 人	常勤 4 人, 非常勤 14 人, 常勤換算	15.7 人

(2) 建物概要

建物形態	併設 <input checked="" type="radio"/> 単独	<input checked="" type="radio"/> 新築 / 改築
建物構造	鉄骨セメント 造り	
	2 階建ての	1 階 ~ 2 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	6,000 円	その他の経費(月額)	円
敷金	有() 円	<input type="radio"/> 無	
保証金の有無 (入居一時金含む)	有() 円	有りの場合 償却の有無	有 / 無
食材料費	朝食	200 円	昼食 300 円
	夕食	300 円	おやつ 円
	または1日当たり 円		

(4) 利用者の概要(平成19年10月10日現在)

利用者人数	18 名	男性 5 名	女性 13 名
要介護1	2 名	要介護2	4 名
要介護3	7 名	要介護4	4 名
要介護5	1 名	要支援2	名
年齢	平均 85 歳	最低 73 歳	最高 91 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	上五島病院、田坂歯科医院
---------	--------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

社会福祉協議会を母体とするホームは、デイサービス、地域の集会所、保育園などの施設が隣接し、顔なじみの地域住民の行き来があり、地域の一員としてしっかり存在している。
 玄関を入ると手作り暖簾に迎えられ、家庭的で季節感溢れる空間が広がっており、職員は利用者の個性や生活歴などを把握し、一人ひとりの理解に努め、敬う気持ちを忘れずに利用者の立場に立った支援を行っており、利用者の穏やかな表情や楽しげな職員とのやりとりの様子が窺える。
 管理者と職員は丸となって、新たに掲げた運営理念のもと、常に笑顔で喜びと安らぎを感じられる支援を行うようお互いに確認し合い日々努力しており、今後の活躍に期待したい。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	前回の評価結果から、理念の見直しに取り組んでおり、職員だけでなく運営推進会議においても協力を得て、新しい理念と実践に向けての指針を作り上げるなど、前向きに取り組んでいる。他の項目への取り組みも含めて改善過程の記録(改善シート)の整備がないが、今後の取り組みに期待したい。
①	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	職員はそれぞれに自己評価を行い、管理者が集約する方法で取り組み課題が見えてきており、自己評価への取り組みが今後活かされると期待できる。評価項目の理解が不十分な面も見受けられるため、今後はガイドブックを参考に理解を深め、更なる取り組みを期待したい。
重点項目	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	運営推進会議の意義と必要性を理解し、参加者の意見をもとに理念の再検討を行うなど、サービスの向上に活かす取り組みを行っており、記録もきちんと残している。また、利用者の生活リズムに配慮し、会議場所が法人内の研修室となっているが、会議の前にホームを見学してもらうなどの工夫も行っている。
重点項目	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	利用者の家族の訪問は頻繁で、職員は家族ともより良い関係を築くよう努めており、家族から季節ごとにパッチワークを提供してもらったり、楽しみごとへのアドバイスをもらったりしている。また、年1回恒例で家族との旅行を実施しており、家族の思いを共有することができる機会となっている。
重点項目	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	積極的に地域との交流に取り組んでおり、地域住民に向けたホームの行事の案内をしたり、在宅介護の相談を受け、独自事業で地域の高齢者や在宅介護者の支援を行ったり、日々関係づくりに努力している。近隣の保育園児が遊びに来たり、職場体験で受け入れた中学生が放課後に立ち寄りてくれたりするほか、老人会のゲートボールに参加し親睦試合をするなど、地域の一員として地域住民との交流が徐々に深まっている。

2. 評価結果(詳細)

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	前回の外部評価結果をもとに、運営推進会議にて意見を心得理念の見直しを行い、笑顔をテーマにホームの名称である「さくら」に寄せて、「ささやかな幸せともに分かち合い暮らす我が家にらんまんの笑み」と、親しみやすく、口ずさみやすいように改めており、全職員が「笑み」を大事に支援していることが伝わってくる。		理念をもとに、地域密着型サービスの視点を盛り込んだホームのケア方針などを掲げられると、更に効果的ではないだろうか。
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	理念を具体化し、年や月ごとに、それぞれのユニットで目標を掲げて、ホーム内に掲示したり、ホーム便りに記載し、管理者と職員で共有し日々利用者の支援に取り組んでいる。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	道向かいの保育園児が遊びに来たり、職場体験で受け入れた中学生がその後も放課後にホームに立ち寄ってくれたりするほか、利用者が以前に審判をしていたことをきっかけに、老人会のゲートボールに参加し親睦試合をするなど、地域の一員として地域住民との交流が徐々に深まっている。また、母体である社会福祉協議会が発行する広報誌に『さくらコーナー』を設け、地域に広く情報を発信している。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	職員全員に自己評価票を配布し、一人ひとりが自己評価に取り組み、話し合いながら取り組んでいる。日頃の支援を振り返った時に、様々な気づきがあり課題と反省点が見えてきたため、今後の課題として取り組んでいく意向がある。また、前回の評価結果から見えてきた課題について、一つずつ改善への取り組みを行っている。	○	評価の意義を理解し、前向きに捉えて改善への取り組みを検討されているので、評価項目の理解を深めながら、今後のサービスの向上に向けて努力していくことが期待できる。
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は、状況に合わせて4ヶ月に1回の開催となっているが、参加者の意見をもとに理念の再検討を行うなど、サービスの向上に活かす取り組みを行っており、記録もきちんと残している。また、利用者の生活リズムに配慮し、会議場所が法人内の研修室となっているが、会議の前にホームを見学してもらうなどの工夫も行っている。		

長崎県 グループホームさくら

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	運営推進会議において、意見をもらったり要望を出したりして連携を図りながら、ホーム等の行事の案内をするなどの働きかけも行っている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	島内に住んでいる家族は頻繁に面会があり、職員から必ず声をかけ利用者の近況を伝えるよう徹底するとともに、請求書と一緒にホーム便りや利用者の近況を伝える手紙を同封して、家族が安心できるように配慮している。また、緊急時には家族にもすぐに連絡をとるようにしている。金銭については、出納帳に記録して管理し、預かり金の補充時に家族の検印を受けている。		預かり金の報告については、家族の希望する報告頻度に合わせて、収支を毎月末締めて請求書を送付する際に同封するなどの工夫をされると、効果的ではないだろうか。
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の訪問時の会話を大切にしており、気兼ねなく何でも言ってもらえる雰囲気づくりができています。職員から家族に意見を求めたり、家族からホーム内の装飾品の提供や作品作りへのアドバイスなどを受けたりすることもあり、多くの意見を聞き運営に反映させていくように取り組んでいる。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	以前に複数名の離職が重なったが、その後は落ち着いており、馴染みの支援の提供が出来つつある。利用者や職員は親しげに会話を交わしており、微笑ましいやりとりが見受けられた。また、職員の離職に伴う利用者へのダメージに配慮するよう心がけている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部の研修会には、職員ができるだけ参加できるように配慮しているが、離島ということもあり研修への参加が困難な面がある。研修に参加した場合は、復命書を作成し、職員会議にて報告を行うようにしている。また、職員同士日々の業務の中で学び合う様子が窺えるが、ホーム内の勉強会等の実施には至っていない。	○	復命書による研修参加後の報告会を更に充実させたり、ガイドブックを活用し、評価項目をテーマにしてホーム内で勉強会を開くなど、学ぶ機会を増やす取り組みを期待したい。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	利用者と一緒に他のホームを訪問し交流を図ったり、グループホーム連絡協議会に加入し、研修などに参加しており、他事業所の職員との交流を通じて様々な気付きがあり、今後の更なる取り組みを検討している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居を検討している地域の高齢者に対して、担当のケアマネジャーとホームの職員と一緒に訪問し、ホームのサービスについて話をしたり、体験入居や見学をしてもらったりして、十分に時間をかけて支援している。また、入居間もない利用者へは、特に細かい見守り、気配りで、不安感を与えないように努め、家族とも相談しながらホームの環境に馴染んでもらえるように支援している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	利用者の個性や生活歴等を把握し、食器洗いや料理の下ごしらえなど得意分野で力を発揮してもらい、職員が利用者から教えられることも多い。職員は笑顔で接することを心がけ、利用者の喜怒哀楽をしっかり見極め利用者に寄り添いながら、共に支えあう関係を築くよう努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員は、利用者との日々の会話を大切にしており、本音に近づけるよう、細かい表情も見落とさないような見守りを徹底し、一人ひとりの思いや意向を把握するように心がけている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	家族や利用者からは、日頃の関わりの中で思いや意見を聞くよう努め、日々モニタリングを行い、職員の気付きなどについてミーティングで意見交換を行いながら介護計画を作成している。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じた見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	介護計画は、3ヶ月毎に見直しを行うとともに、利用者の状態等に変化が見られる際にも見直しを行っている。見直しに際しては職員間で意見を出し合い、利用者の状態に合わせた支援目標を立てている。また、家族には計画を見直した後に確認してもらい、意見があれば取り入れるようにしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	気候の良い時期には、月に1回利用者全員がお墓参りできるように支援している。また、介護保険外の独自事業として、家族の出張や遠方への外出などで介護者が確保できない場合に、地域の高齢者の一時的な入居を受け入れており、地域住民に対しても事業所の多機能性を活かし、柔軟な対応をしている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居後は、地理的条件や医療機関が少ないこともあり、ほとんどの利用者が協力医療機関での受診となっており、契約時に説明し、理解を得ている。また、2ヶ月毎の定期受診により、予防や現状維持に努め、適切な医療を受けられるように支援している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	現時点では重度化や看取りの支援については、方針が決定しておらず検討段階であるが、これまでに、家族と話し合いを重ねながら、ホームで終末期の支援をした例もある。	○	医療機関との連携など、ホームにおける看取りの支援体制整備、他の利用者への影響等を踏まえて、看取りの方針を検討し、明文化されることを期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	職員は利用者を敬うことを忘れず、利用者の立場に立ち、自分がされて嫌なことはしないように支援している。訪問調査時は、職員同士や利用者との会話の声は適切で、人前での気になる声かけや支援も見受けられなかった。また、記録等の持ち出しを禁止し、利用者の写真や名前の広報誌への記載の際にも同意を得るなど、個人情報の保護、漏洩防止について、全ての職員が徹底している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	概ね一日の流れは決まっているが、利用者起床、食事、入浴、散歩などを時間に沿って強制することではなく、利用者一人ひとりのその日の状態に配慮し、それぞれの一日のリズムを作り出し、できる限り要望に添った支援を心がけている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事に時間がかかる利用者には早めに食事を始めてもらうなどの配慮をされており、介助の必要な利用者には、食べやすいように姿勢などに配慮し、語りかけながら介助しつつ職員も一緒に食事を摂っている。職員も含めた全員が箸立てから順番に自分の箸を取り、職員と利用者が一緒に食卓を囲み、笑いのある楽しい雰囲気を感じられた。また、誕生会など特別な日には、それぞれの好みの料理を準備したり、月1回程度の外食や出前など、変化を持たせ食事を楽しみながら美味しく食べられるように工夫している。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	毎日入浴できる体制を整え、利用者のその日の状態や希望に添って支援しており、週に1回は隣接するデイサービスの大浴場も利用できるようにしている。職員は、入浴を身体の状態の把握や本音に近づける時間と捉えており、利用者の入浴の有無、洗髪の有無などを記録し、翌日の担当者に申し送りをして日々の支援を行っている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	利用者一人ひとりの個性や得意な事を把握し、それぞれが力を発揮できる事を生活の中に見出して支援しており、家事などの役割を担ってもらっている。また、手芸等の楽しみ事への取り組みなど、職員からも声をかけており、無気力で引きこもりがちだった利用者が貼り絵を始めて明るく元気になり、見事な作品を作成し居室や廊下に飾り、他の利用者への刺激にもなっている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	日常的に外気に触れたり、季節を感じることを大切に考えており、毎日食材の買出しと一緒に出かけたり、天候に合わせてひなたぼっこやドライブをしたり、近くのゲートボール場に試合を見に行ったりしている。また、気候がいい時期には、中庭でおやつを食べるなど工夫を施している。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	非常口の扉は鍵をかけているが、日中は玄関に鍵をかけることはなく、職員がそれぞれに気配りをして、利用者の見守りを行い、安全に配慮した支援を行っている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	避難訓練は夜間想定も含め、年2回消防署立会のもと実施しており、避難口や誘導順路についての指導を受けるとともに、消火器を使った初期消火や人工呼吸などの応急対応についても訓練し、非常時に備えているほか、19年3月にはスプリンクラーも設置し、対策を講じている。また、現在利用者には喫煙者はいないが、職員はホームの外の喫煙所を使用している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分の摂取量、排泄状況や血圧等を記録し、体重測定と合わせて健康面の支援に役立てている。体重の減少などが見られたら早めの対応を心がけ、主治医や栄養士の指導を受けるほか、献立は1ヵ月分を作成しているが、買い物の状況や利用者の希望で変更することもあるので、バランスが取れるように母体法人の栄養士にもアドバイスをもらうようにしている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関を入ると手作りの「さくら」の暖簾があり、対面式の台所から包丁の音や料理の匂いが感じられ、家庭的な雰囲気であるとともに、ユニットごとに紅葉やクリスマスなどの装飾により季節感のある空間づくりにも配慮している。また、浴室は広く、滑りにくい加工を施すなどの工夫があり、トイレも身体機能に合わせて使いやすいような配慮がある。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各居室の担当者を決め清潔保持に努めており、利用者には、自分の作品を飾ったり、自宅から仏壇などを持ち込んでもらったりしており、利用者が自分の部屋として居心地よく過ごせるような空間づくりに配慮している。また、居室のポータブルトイレは家具調のものを置き、使用しない昼間も違和感のないように配慮している。		